



浄土真宗本弘寺婦人会だより

平成10年9月 第5号

暑さ寒さも彼岸までと申しますが、本当に、月日の流れる早さに驚いてしまいます。

今年、蓮如上人様500回忌御遠忌法要にもお会いでき、婦人会の方々もお参りさせていただきました。

さて、ご承知のように、蓮如上人は、真宗の他力念仏の教えの肝心なところを、分かりやすい文章にして表され、手紙という形で多くの門徒に書きあたえられました。これを「御文」と申します。幾度かお耳になさったことでしょう。

白骨の御文をかかげさせていただき、真宗の教えを、味わっていただきたいと思います。

白骨の御文 (5帖目第16通)

それ、人間の浮生なる相を、つらつら観ずるに、おおよそ、はかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。

されば、いまだ万歳の人身をうけたりという事をきかず。一生すぎやすし。いまにいたりて、たれか、百年の形体を、たもつべきや。

我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もとのしづく、すえの露よりもしげしといえり。

されば、朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身なり。すでに、無常の風、きたりぬれば、すなわち、ふたつのまなこ、たちまちにとじ、ひとつのいき、ながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃季のよそおいを、うしないぬるときは、六親眷属あつまりて、なげきかなしめども、更に、その甲斐あるべからず。

さてしもあるべき事、ならねばとて、野外におくりて、夜半のけむりと、なしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あわれというも、中々おろかなり。

されば、人間の、はかなき事は、老少不定の、さかいなれば、たれの人も、はやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏を、ふかくたのみまいらせて、念仏もうすべき、ものなり。あなかしこ、あなかしこ。

{由縁}

若い娘を亡くした親族の嘆きに、接せられた蓮如上人が、お出しになられた御文。

{大意}

人間の一生というものを考えてみますと、何ともはかなく幻のようなものです。

いまだに一万年生きた人がいるということは聞いたことはありません。人の一生というのはあつと言う間に過ぎ去ってしまうものです。

今日にも、明日にも、木の葉の滴がぼたぼたと地面に落ちるように、次々に誰かがどこかであの世へと旅立つのです。これが真実であります。

だから(お嬢さんのように)、「たとえ、朝可愛らしくて血色のいい顔をしていても、夕方には白骨となってしまう」というのは、人の世の常であり、珍しいことではありません。浮き世での生が終わるときに、「無常」の風が、(永遠の世界から)吹いてまいります。するとたちまちにして私たちの二つのまなこは閉じ、息も止まり、新鮮な桃のような赤みを浮かべていた顔も変わり果ててしまうのです。もうそのときには、家族親戚一同でただただ嘆き悲しむことになります。

そして、葬儀を済ませ、荼毘に付せば、ただ立ちのぼる煙となってしまう、後には白い骨だけが残ります。無常であります。

だからこそ、私たち生きている人間にとって一番大切なことは、いつ死ぬかもわからない身であると自覚し、「後生の一大事」を解決すること。(「我が名を称するものをみな救う」という)み仏の本願を深く信じて、報謝の念仏を申すことであります。

～役員より一言～ 「お彼岸を迎えるにあたって」

今年も又、秋のお彼岸を迎える日が参りました。私はいつも秋になると、何となく心寂しいような、心細いような気持ちになります。

でも、お彼岸が近くなると、お寺様からご案内のハガキを頂き、今年も又、お中日にお参りをさせていただき、こうして生かされているのは、阿弥陀様のおかげと思うと、何となく明るい気持ちになってきます。そうして自然に(ナムアミダブツ ナムアミダブツ)とお念仏の心が湧いてくるのです。

御住職の法話の中に、「お念仏の念は(今の心と書きます。)お念仏は、苦しいときも、寂しいときも、今の心を大切にし一日一日を、しっかり生きていくようにとの(み仏の)はげまし」と、聞かせていただきました。

私たち本弘寺婦人会は、毎月八日に定例会を行っています。その都度、いろいろなお話をお聞きし、如来の真実を求めることができるならば、この上もない幸せと思います。

今年も又、二十日からお彼岸を迎えますので、毎年のようにお茶の接待をさせていただきます。どうぞお立ち寄りくださいますよう、お待ちしております。

役員より。